

# 生命を大切にするための教育について

## —施設実習の持つ意味を中心に—

佐藤 達 全

### 概 要

小中学校において「生命を大切にする教育」の充実が叫ばれているにもかかわらず、それと相反するような事件が後を絶たない。その原因は、こうした事件を引き起こした本人の問題だけでなく①家庭や社会において、煩わしいからとの理由で心と心のふれあいを避けるような風潮があること、②日常生活から「死」やその前段階としての「老い」が遠ざけられてしまった現代社会の構造、③学校教育において「生命を大切にする」ことは取りあげられているものの、「人の死から目をそらそうとしている」学習指導のあり方など、子どもたちをとりまく環境も影響しているのではないだろうか。

「生命を大切にする」ことは「知識として教える」だけでは必ずしも十分とは言えないし、「死」から目をそらしていたのでは「生きる」ことの本当の意味はわからないのではないだろうか。小学校高学年の児童の相当数が「人が死んでも生き返る」と思いこんでいるという調査結果が、そのことを物語っているように感じられてならない。

ところで、保育科の学生は保育士資格を取得するために福祉施設での実習が必修として課せられる。施設では、身心にさまざまなハンディを持つ人びとが職員の支援を受けながら日々の生活と取り組んでいる。そこで、保育科の学生の施設実習に焦点を当て、障害を持つ人びとが一生懸命に生きている姿や、そうした人びとを愛情を持って支えている施設職員の姿から「生きる」ことについてどのようなことを感じたかを調査し、「生命を大切にする教育」の手がかりを探ってみた。

## 1. 問題の所在

最近の新聞やテレビには毎日のように少年犯罪のニュースが報じられている。実際に少年犯罪が増加したり凶悪化したりしているかどうかについては、視点の違いによって肯定・否定の両面の見解が示されているし、ここではそれを問題にすることが目的ではないので、これ以上は触れない。しかし、近年の少年犯罪には質的な変化が起きていることが指摘されている。たとえば、奥平康照（和光大学教授）は1979年に発生した東京の学者一家の高校生による祖母殺しから1989年に東京足立区で発生した無職少年らによる女子高校生監禁・殺害・コンクリート詰め遺棄事件までの6件

をとりあげて、次のように分析している。(注1)

- (イ) 一見したところ安定した家庭を営んでいると見える家族に事件が起こっている。
  - (ロ) 「明るい」「ひょうきん」などと評されていた「ふつうの子」が、重大事件を起こしている。
  - (ハ) 殺人のあとで、すぐには苦悩や反省を表していない。
  - (ニ) 殺害しなければならなかったほどの動機や利害を、本人自身も明らかにすることができない。
  - (ホ) 単に殺すだけでなく、必要以上に相手の肉体を傷つけ破壊している。
- そして、「これらの特徴は最近の少年犯罪にも共

通する」とし「衆目一致の不良少年ではなく、経済的にも安定した家庭で親から大切にされて育った『普通の子』が、残虐事件を次々に引き起こすようになった」と述べている。(注2)

さらに、豊川市の主婦殺しや佐賀のバスジャック殺人事件、東京池袋の通行人襲撃事件などを例にあげ、最近起こっている少年犯罪に「まったく無関係の人を誰でもいいから殺傷する」という共通点があると指摘している。その後も同様の事件は後を絶たず、2000年には大分県で15歳の男子高校生が近所の一家6人を死傷させる事件が起きている。この事件の動機について2000年11月29日付の読売新聞社説には次のように記されている。

この事件の異常さは、少年が一家全員の殺害を図った点にある。犯行に使ったナイフを研いで事前に準備したり、犯行後油をまいて放火し、証拠隠滅を図るなど計画性、冷酷さも際だっている。(中略)少年は、被害者宅に下着などを盗みに何回か侵入しており、自分の母親を通じて被害者から再三注意を受けていた。それが自分の父親や周囲に発覚するのを恐れ、口封じを

図ったとの見方も出ている。

そして「不気味なのは、命を奪うことに恐れやためらいが感じられないことだ。他の少年による凶悪事件とも共通する怖さだ」と指摘し、「今回の少年は、犯行前に凶悪な連続殺人を描いたホラービデオを借りていたり、残虐シーンの多いテレビゲームに熱中していた」として、捜査当局の「凶行前に映画の主人公をまねた服装を用意しようとした節もあり、ゲーム感覚で行われた犯行」という見解を紹介している。

こうした状況については、人間関係の希薄化、他者への無関心、虚構と現実との境界線が失われてしまったことなどが、その原因とされている。一方で、「いのちの尊さ」を教える教育に力が入れられていることも周知の通りである。それにもかかわらず、以前よりも治安が悪化し凶悪な犯罪が増加しているように感じられる。もちろん、成人の犯罪の方が多きことはいうまでもないのだが、近年は加害者の低年齢化も大きな問題になっている。特に最近は小学生や中学生による殺傷事件が後を絶たない。なぜ、次から次へと事件が起こる

事 件 名	年齢 (当時)	発生年月日	処 分 結 果
神戸市・児童連続殺傷	14	1997年 2－5月	医療少年院送致、今年3月仮退院 精神鑑定実施
栃木県黒磯市・女性教諭殺害	13	1998年 1月28日	教護院(現・児童自立支援施設)送致
愛知県豊川市・主婦殺害	17	2000年 5月1日	医療少年院送致 精神鑑定実施
西鉄バス乗っ取り殺傷	17	2000年 5月3日	医療少年院送致 精神鑑定実施
大分県野津町・一家6人殺傷	15	2000年 8月14日	医療少年院送致 精神鑑定実施
沖縄県北谷町・中学生集団暴行死	13(1人) 14(2人) 16(1人)	2003年 6月28日	13歳は児童自立支援施設送致、14歳の2人は初等少年院送致、16歳は逆送され起訴
長崎市・男児誘拐殺人	12	2003年 7月1日	児童自立支援施設送致 精神鑑定実施

のであろうか。前頁の表は1997年以降の少年が加害者となった傷害・殺人事件である。(注3)

さらに本年(2004)の6月には、長崎県佐世保市の小学校で6年生の女子児童(11歳)が同級生の女子児童をカッターナイフで殺害するという事件が発生した。この事件では、加害者と被害者は「仲良し」だったという。また、昨年(2003)発生した長崎市の男児誘拐殺人事件の犯人(12歳)は、成績がトップクラスであったという。その中学生が4歳の男児をビルの最上階から落としたのである。

奥平の指摘にもあるように、一見、「何も問題がないように見える」中学生や小学生がこのような重大事件を引き起こす背景は何だろうか。佐世保市の事件で指摘されたのは「生命の実感がない」ということである。加害児童の処遇について9月15日に長崎家裁佐世保支部は「女児の取った行動の結果は重大かつ悲惨。個別処遇が望まれ、他害・自傷の可能性がある」として「児童自立支援施設」に送る保護処分を決定した。審判を行った長崎家裁佐世保支部ではその理由を次のように示している。(注4)

女児は、本件行為当日に一時保護され、その後3か月余りにわたり、観護措置や鑑定留置による身柄拘束を受ける中で、裁判官、家庭裁判所調査官、鑑定医、鑑別技官、さらには付添人や保護者らから、数え切れないほど多数回にわたり問いかけをされ、自ら行った重大行為について振り返り、内省する時間と機会を十分持った。その中で、女児なりに努力する様子を見せたものの、その人格特性ともあいまって、現在に至ってもなお、自らの手で被害者の命を奪ったことの重大性やその家族の悲しみを実感できないでいる。

その背景には、女児は、愛着やこれを基盤とする共感性に乏しいことから、自己の悲しみの経験や共感性を基盤にした「死のイメージ」が希薄であるため、女児にとって人の死とは「い

なくなる」という現象以上に情動を伴うものになり得ていないことが挙げられる。

ここに挙げられた理由が女児の気持ちのすべてであるかどうかは定かでないが、「死ぬということが理解できていない」や「人と共感できない」という点は、同じ長崎県(長崎市)で昨年(2003)に引き起こされた男児誘拐殺人事件で、加害者の男子中学生(12歳)を児童自立支援施設に送ることを決定した理由とも一致している。さらには、その3年前に愛知県で17歳の少年が主婦を殺害した事件でも、名古屋家裁は「他者も自分と同じ人間として認識し、理解し、思いやったりする共感性の能力の著しい欠如」と指摘しているのである。

こうした事件が起こるたびに、教育関係者からは「命の大切さをもっと徹底して教えたい」という見解ががくりかえし表明される。実際に教育現場でそのような取り組みが行われていることも確かである。それならば、なぜ次から次へと同じような「事件」が発生するのであろうか。

## 2. なぜこうなったのか

その理由の一つとして、誕生や老化・死が日常生活から遠ざかってしまったことが指摘されている。たとえば、日本人の出産場所についてみてみよう。日本助産婦会「60年のあゆみ」などによると、その前身の日本産婆会が設立されたのが昭和2年(1927)で、会員は5万人で、全国各地に存在していたという。昭和34年の国の調査では産婆のいない町村が全国の2割に上るというが、このころの分娩の98%は助産婦が取り扱い、出産の場所は産婦の家庭が大半であった。やがて出産場所が病院等になり、昭和35年(1960)ころになると、50.1%と過半数になり、自宅を上まわるようになったのである。(注5)

一方、死亡する場所も以前はその多くは自宅であったのが、現在では病院等になってきた。昭和25年(1950)当時、年間の死亡者90余万のうち、病院や診療所で死亡した人は10万人ほどに過ぎ

ず、80万人以上が自宅など医療機関以外の場所で死亡していた。ところが、平成4年(1992)では、年間85万人あまりの死亡者のうちで病院や診療所等で亡くなる人が65万人を超え、自宅死は17万人と全体の20%にまで減少している。

誕生に関しては、昭和51年以降、病院等の占める割合は99%以上になった。ここ10年間の出生の場所を見ると、病院や診療所が99%を超え、自宅はわずかに0.1%~0.2%しかない。出産時の母子の安全を考えると、設備の整った病院での出産を否定する理由は特に見あたらないが、死についてはどうであろうか。日野原重明(聖路加国際病院)は、加藤博史(龍谷大学短期大学部教授)「わが国における死の質の指標の構築に関する研究」の中で、

①人の死が医師や看護婦の「仕事の一つ」として扱われる。

②家族が立ち会い手を握ることが出来ない。  
という二つの理由を挙げて病院での死が望ましくないと指摘している。<sup>(注6)</sup> いずれにしても人の誕生や死の場面が私たちの日常生活から離れてしまったことは、「いのち」の尊さに気づいたり人との共感性を育てたりすることによってマイナスに作用していることが想像できる。

さらにそれだけでなく、「子どもをとりまく環境の変化」の中で、子どもの直接体験の機会の減少とマスメディアの影響を指摘する意見もある。

たとえば上野恭裕(園田学園女子短期大学)はジョン・デューイの経験主義教育をもとに「社会・家庭・集団保育施設という保育の場においては、子どもに生き生きとして具体的な直接体験を経験させる世界を構築してやることが何よりも大切であり、生の体験を経てから、子どもたちがようやく物事を理解するようになるということを認識する必要がある」と述べ、情報化の代表としてテレビを取りあげ、「子どもの生活と非常に密着しているテレビは、すでに生活の一部となり、子どもの感受性を鈍らせ、自閉的性格を増長せしめ、ま

た身体的には、近視・姿勢の悪さ等の悪影響を及ぼしていることが想像できる」とその弊害を指摘して、「間接経験に頼り過ぎて、社会性の希薄な人間や人とのかかわりを苦手とする者が多くなる」と述べているのである。<sup>(注7)</sup>

また、現代社会の問題として指摘するのはカウンセラーの富田富士也である。富田は、

「よい子」の凄惨な事件が増えてきた背景には、本人のもって生まれた性格というより、時代の豊かさが一因としてあげられるように思います。身の周りのあらゆるものが便利さと効率を求め、それが人と人との生身のふれあいの場をなくしていつてしまったということです。

感情を抑圧している「よい子」は、もともとコミュニケーション能力がないわけではありません。利便性ばかりが追求されてきた世の中で、生身の人間とふれあい、コミュニケーション能力を「育む場」を奪われてしまっているのです。と、生身のふれあいがいかに重要であることを強調している。<sup>(注8)</sup>

この指摘のように、私たちが「いのち」の大切さを真に認識し、それに基づいた行動ができるようになるためには「いのちは大切です」と教えるだけでなく、人と人のふれあいを体験すること、いいかえるならば「いのち」と「いのち」のふれあいこそが重要な意味を持っていることに気づかなければならないであろう。

こうした考えは子育てに関する見解にもよく見られる。たとえば、日立教育振興財団・日立家庭研究所の土谷みち子は「生後間もないころから長時間にわたって、テレビやビデオを見せることは、いいことだとは思いません。1歳ごろまではできるだけ見る時間を減らし、生身の触れ合いを大切にしてほしい」と述べている。<sup>(注9)</sup>

私たちが思いやりの心を育て、人と共感できるようになるためには、小さい頃から人と生身のふれあいを体験する必要がある。ところが、これまではその重要性にあまり気づけなかったのではな

いだろうか。仮にその重要性に気づいても、現実にはさまざまな理由から生身のふれあいの機会を積極的に設けようとはしなかったと考えられる。

### 3. 小学校の学習内容の問題

こうした現代社会から欠落した部分を補うことを目的に、幼稚園や保育園では動物飼育や植物栽培等を行うことによって、子どもたちに生き物とふれあう機会を提供する試みが行われている。また、小中学校においてもさまざまな教科を通じて「いのちを大切にする」心を育てるための取り組みが行われてきた。(注10)

しかし、そうした取り組みも決して十分とは言えない。それは、「生」に対する学習は行っても、「死」についての学習機会が少ない点である。このことに関しては、すでに伊藤隆二（東洋大学教授）が「これまでの学校教育においては『死』がとりあげられることはきわめて少なかった」と指摘している。その理由として伊藤は、

とくにわが国では「死」は縁起が悪いものと考えられているために、人びとはそれを口にすることをためらう傾向がある。また、学校教育では、教師は子どもや若者たちに夢や希望を抱かせ、未来は明るいことを知らせる役目を持つ、という常識があったために、「死」だけでなく、「病」「老」といったテーマをとりあげることがほとんどなかった、といってもよい。と述べている。(注11)

たしかに、日本人は昔から「死」を忌むべきものとして避けてきた。日常生活と「死」とを厳格に区別しようとする意識は、現在でも死者を送る儀礼などに色濃く残っている。しかし、それは「病」や「死」という現象を生物学的・医学的に理解することができなかった時代の名残であろう。また、「老」に関しては、以前は大家族の中で、みんなが協力して老いた家族の世話をしていたはずである。多くの老人が家庭とは別の老人施設や病院で最期を看取られるようになったのは比較的最近の

ことであり、日本経済が高度成長を遂げ、夫婦共働きが一般的な家庭の姿として定着するようになってからのことである。

このような、死から目をそむけた教育の結果、人は死んだらふたたび生き返るという小学生の「驚くべき感覚」が生じてくるのかもしれない。文科省初等中等教育局教育課程教科調査官・国立教育政策研究所教育課程調査官（当時）の永田敏雄が次のような興味深い調査結果を紹介している。平成14年に中村博志等が首都圏の小学校高学年372名に「人間は死んだらどうなるか」について調査したところ、「一度死んだ人が生き返ることがあると思うか」という質問に対する回答で、「ある」と「ない」は同数で、126人（33.9%）、「わからない」は117人（31.5%）であったという。

このような結果について、その原因を「間接体験や疑似体験に埋もれた生活の中で、生き物に触れる感覚があまりに乏しく、その誕生や死を実感できる直接体験から遠ざかっている子どもが多いからだろうか」と分析し、「その結果、子どもの生命に対する感覚がいつそう貧弱になり、平気で〈死ね〉という言葉で連発するようになる」と述べている。永田はまた自らの体験から「子どもは生命についてさまざまなイメージをもっているが、何にも代えられない生命、かけがえのない生命という感覚が子どもの心の中で少しずつ崩れ始めてきている」とも述べている。(注12)

こうした状況に対し、私たちは改めて「いのち」とは何か（生まれるとは、生きるとは、老いるとは、死ぬとは）について学ぶ必要性を痛感する。しかも、それは知識としてだけでは不十分で、日常生活での体験と密着した心情にまで深められなくてはならない。その意味で、心身に障害を持つ人とかかわったり老人のお世話をしたりすることも、そうした人の心情を推しはかたり、自分がどのような気持ちで接したらよいかに想いを致すことができるようになる重要な契機といえるのではないだろうか。

もう一つは、「死」を忌み嫌うべきものとして目をそらすのではなく、生と死は私たちの中に「対」として存在するという認識を持つことが重要であろう。「死」という現象が起こるためには「生まれる」ことが前提となるから、生まれた「いのち」がどのように成長し、自立した生活ができるようになるか、といった成長や発達過程に目を向けること。さらに、成長した「いのち」もいつまでも若さが保てるわけではなく、やがて必ず老いていくことを自分自身の生活の中で体験する必要がある。そのためには、老人のお世話をすることは大きな意味を持っているであろう。

また、種々の障害を抱えながら日々の生活と懸命に取り組んでいる人びととのふれあいも、同様な意味を持っているであろう。重度の障害を抱えた人にとっては今日一日を生きることがどれだけ大変なことなのかを、そうした人への生活介助を通じ認識することができるであろう。

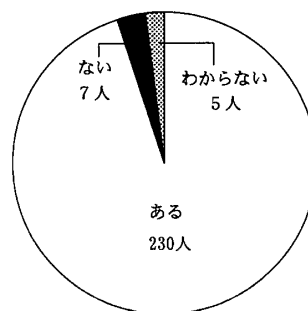
こうした体験を通して、人は自分や他者の「いのち」についてさまざまなことを感じたり考えたりするはずである。そして、どんなに長生きをしても「死」が訪れたときの別れの寂しさや悲しさを味わうことが、生の重みを感じさせることにつながるはずであり、生命とはどんなものか（観念としてではなく）について深く洞察するきっかけになるであろう。それが「いのちを大切にする」という行動に結びついてゆくのではないだろうか。

このような観点に立つと、保育科の学生が種々の障害をもつ人びとが生活する福祉施設で実習することにはきわめて大きな意義があると思われる。なぜなら、そうした施設では障害を持ちながら懸命に生きている人びとと直接にふれあうことができるからである。そこで、保育科の学生が施設における実習を通じてどのようなことを感じたかを調査してみた（調査は平成16年9月に2年生261名を対象にして行い、242名から回答が得られた）。

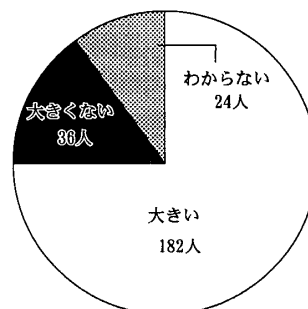
#### 4. 生命とふれあう体験としての施設実習

学生が施設の実習でどのような感想を持ったかを紹介する前に、施設をどのように認識していたかを知っておく必要がある。

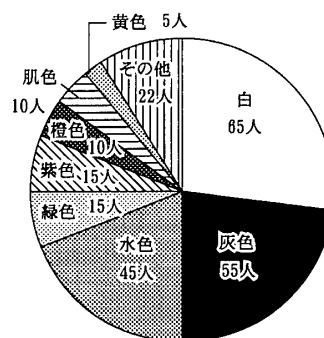
〈質問1〉施設実習に対する不安がありましたか。



〈質問2〉その不安は幼稚園・保育園実習に比べて大きいですか



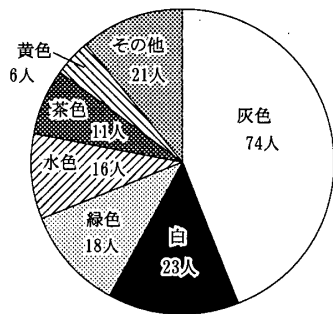
〈質問3〉施設のイメージは何色ですか。



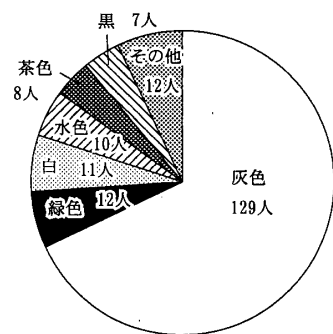
この結果から、幼稚園や保育園の実習に比べて学生の不安が大きく、施設に対するイメージは必ずしも暗いというわけではないものの、温かな印象を抱いていないことがわかる。しかもこうした

傾向は、今回の調査だけに見られることではない。筆者は1991年と1992年にも施設実習に関する学生の意識調査を行ったが、そこで明らかになったことから施設に対するイメージは決して肯定的とはいえなかった。(注13)

〈1992年の意識調査〉

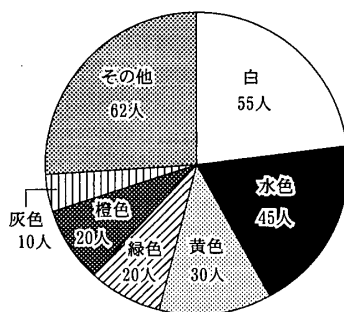


〈1991年の意識調査〉



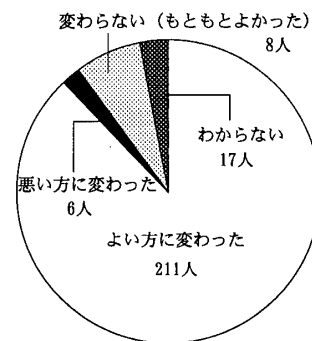
さらに、実習に対して「不安に思った」「イヤだなあと思った」と否定的な学生が80%近くを占め、「興味を持った」「頑張ろう」と考えている学生は20%に過ぎなかった傾向は、今回の調査と同様であった。ところが、実習後の意識ではそのイメージが一変している。

〈質問4〉施設のイメージは何色ですか。



色のイメージでは灰色が大幅に減り、それに代わって黄色や橙色が増加した。さらに、表にはないがピンクというイメージまで登場している。それを裏付けるように、次の質問ではほとんどの学生は施設のイメージがよい方へ変わったと答えている。

〈質問5〉実習をして施設のイメージが変わりましたか。



もちろん、イメージの変化には個人差があるし、実習した施設が比較的街中にある場合とそうでない場合とでは受けとめ方は違っていているし、知的障害と身体障害とでは印象が大きく異なっていた。また、宿泊実習は通園実習に比べて実習中の緊張感が強いと思われるので、それもイメージに影響しているようである。しかし、だからといって、こうした事柄が必ずしもすべて印象を暗くしているとは言い切れない。

いずれにしても、実習を体験することによってそのイメージがよい方向に大きく変化したことは間違いない。卒業後の就職先を幼稚園や保育園から施設に変更したいという学生も5%ほど出てきた。それでは、学生は施設実習を体験してどんな感想を持ったのであろうか。これからの紹介は数的にまとめるのではなく、学生の言葉をそのまま示すことにする。その方が心情がよくわかると考えるからである。ただ、上に述べたように実習施設の種類によってその印象が多少は異なるので、主な施設の種別にまとめてみた。

〈入所者に接しての印象〉

#### ①知的障害者施設

- \* 思っていたよりも入所者が明るく、元気で、優しくかった。
- \* 悪意がなく、思ったことを素直に表現している。
- \* 純粹で明るいので、大好きになった。
- \* 本当に障害を持っているのだろうかと感じるほどだ。
- \* 思っていた以上に自立していると感じた。
- \* 素直で思いやりがあったと思った。
- \* コミュニケーションが難しい。
- \* どの人も温かな心を持っていた。
- \* 自分が忘れていたものを思い出させてくれるような感じがした。
- \* 心が純粹だと感じた。
- \* 入所者が他の人の面倒を見ていたことに感激した。
- \* 入所者は笑顔が多く、毎日が充実しているようだった。
- \* 入所者に接して自分の心が温かくなった。
- \* 一人一人が個性的であり、心をひきつける所があると思った。
- \* 笑い顔が自然で、とてもよかった。
- \* 障害があっても自分と変わらない人だと思った。
- \* 障害があっても頑張っている姿に心を打たれた。
- \* 今まで自分が偏見を持っていたことを反省した。
- \* だれの心も、とてもきれいだと感じた。
- \* みんながとても親切で優しいと思った。
- \* みんなが優しく自分が元気をもらったように思った。
- \* 障害を持っている事以外は自分と同じ人間だと感じた。

#### ②身体障害者施設

- ※ みんながとても優しくかった。

- \* みんなが生き生きしていたことが印象的だった。
- \* 障害があっても、ふつうの人と同じ考えをしていた。
- \* 年上の人が多く、人生経験を聞くことができ、勉強になった。
- \* だれもが毎日を生き生きと生活していると感じた。

#### ③知的障害児施設

- \* 人一人が個性的だと思う。
- \* 障害があっても毎日元気に生活していることに感動した。
- \* ふつうの子どもと変わらないと思った。笑顔が多く、暗さをまったく感じなかった。

#### ④児童養護施設

- \* 心のケアの大切さと、関わり方の難しさを感じた。
- \* 明るくて人なつこい印象を受けた。

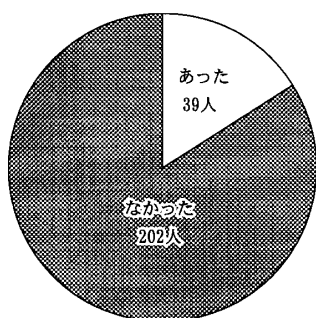
〈指導員や保育士に対する印象〉

- \* 利用者のことを本当に考えていると思った。
- \* 思いやりがあつて優しい人ばかりだ。
- \* 安心できる人柄だと感じた。
- \* 元気で明るく前向きだと思った。
- \* 利用者との間に強い信頼関係が出来ていると感じた。

学生の声の主なものを紹介したが、このようにほとんどの印象がよいもので、当然のことながら、実習中に「イヤだなあと不快に感じたこと」はそれほど多くはなかった。



〈質問6〉実習中にイヤだなと思ったことがありますか。



「あった」という回答では、利用者の中にわがままな人がいたために対応が難しかったこと、授産施設で慣れない「労働」をしたこと、男性の入浴介助等の異性との関わり方、自傷行為等に対する驚きや援助に対する拒否反応等をその理由にあげる学生がいた。

反対に、実習に行ってよかったかという質問には、ほぼ全員が「よかった」と答えている。そして、印象に残っていることでは、人間的な触れ合いができたことが最も多く挙げられていた。最後に〈今回の実習で考えたこと〉を尋ねる質問では、次のようにほとんどの学生が肯定的な回答をしていた。

- \* 障害を持っていても、自分のできごとと一生懸命に取り組んでいる姿に感動した。
- \* 毎日同じ作業に真剣に取り組む様子を見て、一日一日の生活を大事にしなくてはならないと思った。
- \* 障害の軽い人が重い人のお世話をしているのを見て、自分もできることは人にしてあげようと思った。
- \* これから保育者になるためには絶対に必要な実習だと感じた。
- \* 今までの生活を見直すことができた。
- \* 自分自身と向きあうことができた。
- \* 社会にはさまざまな方が生活していることが理解できた。
- \* 人間的にひとまわり大きく成長することが

できたと思う。

と、自分の生き方を振り返ったり、人間的に成長したと考えたりして、「生きる」ことや「いのち」について深く考えるようになったことが伺える。

もちろん、障害に対する認識や理解が深まり、障害者に対する偏見がなくなったことは言うまでもない。また、このような結果は、前回の調査でも、「実習を経験して自分の生き方が変わった」と答えた学生が80%ほどいたこととも合致している。(注14)

中でも、

- \* 「生きる」ということについて考える機会になった。
- \* 生きているだけで素晴らしいと考えるようになった。

と感じている学生が相当数いたことは特筆すべきであろう。

さらに、実習の調査とは関係のない「国語表現演習」の授業で「夏休み中のできごと」というテーマの作文を提出してもらったところ、きわめて興味深い結果が見られた。施設の実習は夏休み中に行われたのであるが、夏休みには就職に結びつく「群馬県私立幼稚園協会主催の採用適性検査」が行われ、今年受験者は600余名で本学学生も約200名(2年生の80パーセント)が受検した。これは毎年行われているもので、群馬県内の私立幼稚園に就職を希望する学生にとって避けることのできない関門である。そのため、短大の1年次から教養科目(国語・数学・理科・社会・英語・音楽・美術・時事問題等)と小論文の対策を講じているほか、夏休みにも対策講座を開いている一大イベントである。このほかにもクラブの合宿や幼稚園・保育園におけるボランティア活動、公務員試験や就職のための活動等があって、2年生は授業の行われている時と同じような多忙な日程に追われていた。

課題は、そうした夏休み中のできごとを一つ取りあげて400字でまとめるというものであった。そ

れを読むと、どの学生の文章からも過密なスケジュールが感じられたが、学生生活最後の夏休みを思い出深いものにしようという気持ちも綴られていた。クラブの合宿や友人との旅行を楽しんだ内容のものも見られた。しかし、最も多くの学生が共通して取りあげていたのは施設の実習についてであり、その数は70パーセントにも達した。このことは、施設の印象がいかに強かったかを明確に物語っているのです、その一部を紹介してみよう。

【学生A】 私が実習させていただいた知的障害児通園施設では、子どもと一緒に過ごされている保護者の方もいらっしゃって驚きました。ただ見ているだけではなく、製作の補助をしたり、全体会に参加したりしていました。朝の自由遊びがおわると帰る、という日があったりして、少しずつ子ども一人で過ごすことに慣れるようにしているのだと思いました。言葉が話せない子ども、どの先生がだれの担当かということがちゃんとわかっていて、実習生として少しの間しか関わることのできなかつた私のこともわかっていてくれたことが、とてもうれしかったです。

【学生B】 実習を通して、障害を抱えていても自分でできることがたくさんあり、そして、一人一人にあった支援が必要ということがわかり、保育と同じ個人差に気づきました。また、実際にその場に行かないうちに勝手なイメージで物事を決めてしまうことはいけないことと感じました。

【学生C】 日がたつにつれて利用者との接し方が少しずつわかってきて、高校生のボランティアの人に「職員の方だと思いました」といわれるほど、利用者として自然に接することができるようになりました。実習を通して自分が成長できたと思います。今年はとても忙しい夏休みでしたが、心に残る思い出ができました。

【学生D】 授産施設では、ふだんやることのない作業ばかりでしたので、とまどってしまいま

したが、利用者や指導員の方が親切に教えてくださいました。利用者は明るくて話し好きな方が多く、また仕事も一生懸命やっていて驚きました。私には施設は暗いイメージしかありませんでしたが、今回の実習でそんなイメージがなくなりました。施設に実習に行くととてもよかったですと感じました。障害者を見る目も変わり、自分が少し大きくなれたと思います。

【学生E】 施設実習をしてよかったと思っています。保育者としてはもちろんですが、一人の人間として現実を受けとめ、考えを深めることができました。ふり返ると、利用者の方と過ごした時間が思い出され、楽しくて仕方ありません。今までに体験したことのないできごとで、たくさんの思い出作りができました。

【学生F】 なぜ介護を行うのか、利用者が何を考えているのかなど、すべてを理解したわけはありませんが、この実習で、施設に対する見方や考え方が変わったので、実習に行くと本当によかったと思います。また、障害があっても一人の人間であること、私たちと変わらないことを実際に感じられたので、この気持ちを忘れないようにしたいと思います。

【学生G】 私は身体障害者療護施設で実習しました。ほとんどの方が重度でしたから、わからないことだらけで、辛くて泣きたい時もありました。そんなとき、「最初はできなくて当たり前だよ。頑張っってね」と励ましてくださる利用者さんがいました。その言葉を聞いて、私は頑張ることができました。介護に関してなにもわからず、迷惑ばかりかけていた私に「ありがとう」「また遊びに来てね」と温かい言葉をくださり、実習へ行って本当によかったと心から思っています。

【学生H】 児童養護施設で実習した私は、不安で一杯だった。小学生や中学生とどのように関わったらよいか悩んでいた。実習三日目に指導員の方と話す時間が設けられ、そこで、改めて

私自身が子どもたちに対して壁をつくっていることに気づかされた。子どもはとても敏感なので、自分が前向きになり、子どもたちを不安にさせてはいけないと思い、その日から何ごとにも積極的に取り組んだ。指導員の方から「子どもたちと入浴してみたら」と勧められ、突然のことで悩んだが、私は子どもと近づくチャンスかもしれないと思った。実際に一緒に入浴し、その後も「また一緒にお風呂に入ろうね」と誘われた時、はじめて私と子どもの距離がぐっと縮んだように思えた。

【学生I】 施設実習では、今まで知らなかった世界を知ることができ、考え方が変わりました。心に残る経験だと思っています。

【学生J】 今までにない体験ができたことは自分の財産になり、今後の保育の面でも役に立つと思います。一人でも多くの方が優しい心で障害者に対し理解の目を持つようになってほしいと思います。

【学生K】 毎日いっしょに過ごすうちに、利用者さんのことをたくさん知り、私の心がとても温かくなりました。言葉では言い表せない、ここでしか得られない貴重なものを得たような気がします。利用者さんや指導員の先生は、人間としていつの間にか忘れていた大切なことを私たちに思い出させてくれたのです。施設で感じた温かい気持ち、先生から教えていただいた人間としての優しさ、利用者さんからもらった素直な気持ちは忘れません。私の人生にとって、なくてはならない貴重な十日間でした。

【学生L】 私自身も実習をする前は、施設というところか遠い存在のように感じていました。こういった考えを持っている人が施設との壁を作り、みぞを大きくしているのではないかと思います。私はこの実習を通して、とても貴重な体験ができました。

【学生M】 利用者の方の重い障害に衝撃を受けたこともありました。うまく会話ができずに

困ってしまうこともありました。しかし、そんな中で確かに感じたことがあります。それは、利用者の方が生き生きと人生を歩んでいるということでした。私よりもずっと毎日を大切に、精一杯生きているということでした。「生きること」この言葉の深さに改めて気づかされました。十代最後の夏休み、温かな思い出がひとつ増えました。

【学生N】 学校で施設について学んだ時、私はなぜか施設を暗い場所だと思ってしまいました。私にとって施設は色で例えたらグレーでした。(中略)10日間という短い実習でしたが、私は利用者さんや職員の皆さんから他では学べないことを教えてもらうことができました。私にとって、施設は温かいオレンジ色になりました。このほかにも多かった内容をまとめると次のようなものである。

\*充実感が味わえた。

\*自分の生き方を見つめ直すことができた。

\*施設に対する見方が変わった。

\*障害があっても私たちと同じだということが実感できた。

\*とても大切なものを感じることができた。

\*施設で実習をして本当によかった。

\*今年の夏一番の収穫は何より施設で実習できたことだ。

\*人間として大きく成長できた。

このことは、ほとんどの学生が幼稚園や保育園に就職することを希望し、施設への就職を第一希望としている学生が10%程度であるという現実をふまえると、きわめて大きな意味を持っていると考えられる。それだけ、施設実習における人と人とのふれあいの意味が大きいことを物語っているのではないだろうか。

また、作文の中で、祖父の死を取りあげた学生がいた。当然のことではあるが、この学生も施設実習と同じように大切なことを体験していることがわかる。

【学生O】 大好きだった祖父が亡くなりました。病名は肺ガンです。(中略)ガンは祖父の体中に転移していて、助かる可能性は1パーセントもありませんでした。(中略)日に日に弱まっていく祖父。最初の頃は「がんばろうね」というと、力強く頷いていたのに、亡くなる数日前には首を横に振り、苦しそうな表情で「もういい」と言っていました。私は生まれて初めて、死の瞬間を見ました。手足はまだ温かく、「おじいちゃん」と呼んだら目を開いてくれるように思いました。私は祖父が大好きでした。けれど、一度も「大好き」と言ったことがありません。この作文を通して天国のおじいちゃんに伝えたい。「おじいちゃん、ごめんね。大好きだよ」。

## 5. 問題点と若干のまとめ

このように学生の人間的な成長にとって大きな意味を持つ実習であるが、介護福祉士養成校の増加に伴って、保育士資格取得のための実習受け入れが厳しくなっているという現実がある。本学学生は保育士資格取得のための実習であるため、卒業後に施設に就職を希望する学生の割合が多いとは言えない。そのため、一部の施設からは「就職する希望がないのだから」と、実習の受け入れに消極的な声も聞かれる。この点を理解してもらうことも課題の一つであろう。

もちろん、施設は施設利用者のために多忙な業務と取り組んでいるのであるから、実習生を受け入れるにも限界があることは当然であろう。しかし、このように人間的な成長を期待できる素晴らしい場なのであるから、保育科の学生だけでなく、より多くの学生が体験できるよう応用ができないだろうか。

そのためには、施設の受け入れ過剰の現実を考慮し、実習生やボランティアの学生が可能な範囲で施設職員の業務を援助することを考えなくてはならないであろう。そのためには、単発的な実習やボランティアでなく、継続的・定期的な活動で

ないと施設の負担ばかりが増えて受け入れが不可能になってしまうであろう。課題は多いかもしれないが、施設とのかかわりを多くすることによって、より多くの学生が障害を持ちながらも懸命に生きている人びととふれあうことが可能になり、それが「いのちを大切にする」心情を育てることにつながっていくのではないだろうか。

また、一部ではあるが「不快な思いを抱いた」学生もいる。その原因の多くは、障害を持つ人についての事前学習が十分でなかったために対応にとまどう場合がほとんどであった。成人のおむつ交換や入浴介助に苦慮する姿も少なくなかったことが作文に表現されていた。そこで、実習前の学習が重要になってくる。

いずれにしても、いわゆる健常者と障害者が理解し合いながら暮らせる社会を実現することが重要なのであるから、資格取得を目的にした実習だけでなく、小中学生や高校生の授業の中に定期的な施設でのボランティア活動を組み入れることに大きな意味があることは間違いない。このことは、障害を抱えた人の施設だけでなく、乳児院や児童養護施設・老人ホームでの活動も大きな意味を持つであろう。

核家族化や少子化が進行する中で、大家族時代に日常生活で自然に学ぶことが出来た「いのち」について学べる貴重な場所が施設であることを考えると、生命を大切にする心を育てるために施設と学校や地域社会が連携することがますます大きな意味を持つてくるように思われる。そうしたなかで、障害を持つ人びとやお世話をしている施設職員の方々から「命を大切にする心」を体験的に学ばせてもらう意味はかなり大きいと言えるのではないだろうか。

(注1) (『東西南北2001イメージと言語』 和光大学総合文化研究所)

このほかに奥平があげているのは次の4件である。

\* 川崎市で浪人生が金属バットで両親殺害 (80

年)

\* 横浜の中学生たちが公園のホームレスを襲撃・殺害 (83年)

\* 名古屋で少年少女 5 人が無関係のアベックを連れまわし殺害 (88年)

\* 東京目黒区で中学 2 年生が両親と祖母を刺殺 (88年)

(注 2) 前掲資料

(注 3) 読売新聞2004年 9 月16日による。

(注 4) 佐世保・小 6 事件家裁支部の決定要旨 (読売新聞 2004年 9 月16日付)

(注 5) 助産婦は看護教育を終了した後、助産婦養成機関で 1 年の課程を修了後、国家試験に合格して得られる資格。妊娠した女性に対する保健指導、出産の介助、生まれた赤ちゃんとお母さんへの育児全般に関するケアを通して家族を援助する。また、広く母親となる女性の性を中心とする思春期～更年期に対する健康への援助も行う。

(注 6) 加藤博史「わが国における死の質の指標の構築に関する研究」

(注 7) 小田豊・上野恭裕・米谷光弘編著『教育課程総論』10ページ (三晃書房)

(注 8) 富田富士也『よい子の悲劇』(河出書房新社)

(注 9) 「テレビよりも生身の触れ合いを」(読売2003年 9 月29日)

(注10)たとえば、「学習指導要領の道徳で示された生命尊重の心の育成に関する内容」について、永田は視点 3 の「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」の中に「動物愛護・自然愛護」や「生命の尊重」の項目として各学年段階に次のような題材をあげている。

	主に動物愛護・自然愛護に関する内容	主に生命の尊重に関する内容	指導や資料に生かされる題材 (例)
1・2 年	3-(1)身近な自然に親しみ、動物植物に優しい心で接する。	3-(2)生きることを喜び、生命を大切にすることをもち。	◇身近な動植物との触れ合い、その飼育栽培や自然に親しむ体験。 ◇生活の中で生きている実感や生きている喜びを感じられることなど。
3・4 年	3-(1)自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動物植物を大切にす。	3-(2)生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にす。	◇動植物の命や自然の不思議さへの感動。 ◇動植物と人間の生命の共通性などについて考えられるもの。 ◇自分の誕生日や生育の過程、病気やけがなどをしたときのことなど。
5・6 年	3-(1)自然の偉大さを知り、自然環境を大切にす。	3-(2)生命がかげがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重す。	◇自然の偉大さ、尊さへの理解。

(『学校飼育動物と生命尊重の指導』23ページ)

(注11) 伊藤「生命尊重は『病』や『死』の学習から」(中等教育資料・平成 8 年 5 月号)

(注12) 永田「道徳における生命尊重の指導と動物飼育」『学校飼育動物と生命尊重の指導』22ページ 教育開発研究所

(注13) 育英短期大学研究紀要第 9 号・第10号所収

(注14) 前掲書

( 2004年 9 月30日 受付 )  
( 2004年10月29日 受理 )

# On Education to Value Life

## Focusing on the Meaning of Students' Training at Welfare Institution

Tatsuzen Sato

### Summary

Although there is a loud cry for repletion of "education to value life" at elementary and junior high schools, endless, contrary affairs have been occurring. They may have been caused by the persons concerned, but I assume that they are influenced by the environment around children such as ① our social environment, where "death" and its previous stage, "old age" have been avoided, ② guiding principle, "trying to avert our eyes from the death of human beings," though "valuing life" is taught in school education.

To value life" cannot be fully appreciated if "it is taught as a sort of knowledge. If eyes are kept away from "death", can "life" get a proper understanding? Upon investigation, a considerable number of pupils in the 5th and 6th grade (of elementary schools) have an idea that "people revive even after their death. This will give an account of the above question, I think.

Now, students of nursery course are required to practice at welfare institutions to get a certificate of nursing. There those who are handicapped mentally and physically endeavor to live supported by all the staff. Therefore I focused my attention on students' training at welfare institutions and investigated their view of "life" through their experiences with the disabled making their efforts to live and with the staff backing up them affectionately. I have made this attempt with the intention of finding a clue to "education to value life".